

アラビア語北レヴァント・ホムス方言と日本語の

依頼行為の対照分析⁽¹⁾

——ポライトネス標識を伴う命令法の例をもとに——

二ノ宮崇司（カザフ国立大学）

要 旨

本稿はアラビア語北レヴァント・ホムス方言と日本語の依頼行為を対照分析することを目的とする。対照分析の結果、学習者が次の誤用を犯す可能性があることを指摘する。第1にホムス方言母語話者が日本語を習得する際、女性ホムス方言母語話者が親しい相手に男性専用の「Vてくれ」を用い、一方男性ホムス方言母語話者は女性日本語母語話者が使用する「Vてちょうだい、Vて」を使う可能性がある。第2に日本語母語話者がホムス方言を習得する際、親しい相手と知り合いの年上の人に使用可能なʔalla jxallik と親しい相手のみにはしか使用できないbhjatakを置き換え可能と考え、年上の人に対してもbhjatakを使い、なれなれしい態度をとる可能性がある。

キーワード：依頼、異文化間発話行為実現プロジェクト、命令法、ポライトネス標識

1. はじめに

本稿は異文化間発話行為実現プロジェクト（Cross-Cultural Speech Act Research Project、以下CCSARP）という枠組みに基づき、依頼の発話行為を研究対象とする。Blum-Kulka et al. (1989) がCCSARPの中で規定する格下げ（downgraders）という項目に着目し、それらがアラビア語北レヴァント・ホムス方言⁽²⁾と日本語においてどのように記述されるのかを明らかにすることを筆者は目指している。格下げには、疑問、条件法、アスペクト、テンス、ポライトネス標識、控えめ表現、甘言などがある。これまで条件節（二ノ宮 2014）を記述したが、本稿ではポライトネス標識を取り扱う。

2. 先行研究

2.1. 異文化間発話行為実現プロジェクトにける命令法及びポライトネス標識

Blum-Kulka et al. (1989:11-12) はCCSARPの枠組みに基づき、依頼について次のように指摘している。「依頼はプレイベントな行動であり、話し手が聞き手に実施して欲しい行動を口頭あるいは非口頭という手段によって示す表現である。依頼はフェイスを脅かす行為（Brown & Levinson 1978）である。つまり聞き手は「依頼」を自分の行動の自由を侵害する行為であると解釈する。一方、話し手は「依頼」に際して、自分の要求を聞き手に押し付けられないように努める」と述べている。ただし本稿は依頼の定義をこれよりも限定する。具体的には、山岡 他（2010: 144）が挙げる「④参与者Bによる当該行為の実行は参与者Aに利益をもたらす」も依頼の定義に含める。なお、山岡 他（2010）の参与者Aは依頼者を、参与者Bは被依頼者を指す。Blum-Kulka et al. (1989:17-18) は依頼を主要行為部、注

意喚起部、補助部という3つに分けている。例えば、(1)のJohnという呼びかけが注意喚起部、依頼内容であるget me a beer, pleaseが主要行為部、依頼の理由となっているI'm terribly thirstyが補助部である。

(1) John, get me a beer, please. I'm terribly thirsty.

注意喚起部 主要行為部 補助部

Blum-Kulka et al. (1989: 18) は主要行為部を直接性という度合いから9つのストラテジーに分けている。その内訳は以下のとおりであるが、下の項目ほど直接性は低くなる。

- ・ 命令法による発語内効力の示唆 (Mood derivable) Leave me alone / Please move your car
- ・ 遂行動詞 (Performatives) I am asking you to move your car
- ・ 緩衝的遂行動詞 (Hedged performatives) I must to ask you to clean the kitchen right now
- ・ 義務の陳述 (Obligation statement) Madam you'll have to move your car
- ・ 願望の陳述 (Want statement) I'd like to borrow your notes for a little while
- ・ 提案 (Suggestory formulae) How about cleaning up the kitchen
- ・ 準備条件の質問 (Query preparatory) Can I borrow your notes?
- ・ 強いほのめかし (Strong hints) Will you be going home now? (Intent: getting a lift home)
- ・ 弱いほのめかし (Mild hints) You've been busy here, haven't you? (Intent: getting hearer to clean the kitchen)

本稿は命令法による発語内効力の示唆を取り扱う。Blum-Kulka et al. (1989: 278-279) は命令法による発語内効力の示唆を「発語行為の文法的な法は慣習的に依頼としての発語内効力を定める。その典型的な形は命令形」⁽³⁾と説明する。その例として、以下のようなものを挙げている。

(2) Leave me alone.

(3) Clean up the kitchen.

(4) Please move your car.

命令法による依頼は(2)、(3)のように命令法のみで表されるだけではない。(4)のように、命令法に対して、ポライトネス標識が付加される場合もある。Blum-Kulka et al. (1989: 285) はポライトネス標識を「協力的な行動を得ようとするために、依頼に対して付加される要素」⁽⁴⁾と説明する。そしてpleaseをその標識と考えている。

Blum-Kulka et al. (1989) はポライトネス標識を格下げという操作の1つと捉えているが、それは依頼の押し付ける力を軽減するというものである。格下げには、統語的格下げの疑問、準備条件の否定、接続法、条件法、アスペクト、テンス、条件節があり、語彙・句的格下げのポライトネス標識、控えめ表現、緩衝表現、主観化表現、語調を弱める表現、甘言、懇願表現がある。

一見、格下げはBrown & Levinson (1978: 134) のネガティブ・ポライトネス・ストラテジー⁽⁵⁾に対応するよう見える。しかしBlum-Kulka et al. (1989: 284) が格下げの1つとして挙げる甘言は「依頼によって話し手と聞き手の間の調和が脅かされるかもしれないが、その調和を増加、生成、あるいは回復するものである」と定義されている。甘言がBrown & Levinson (1978: 77, 108) のポジティブ・ポライトネス・ストラテジー⁽⁶⁾に対応していると

考えられるため、Blum-Kulka et al. (1989) による格下げはポジティブあるいはネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを実現させるための操作であると定義しなおす。

2.2. 日本語の命令法及びポライトネス標識

Takahashi (1996: 220) は本稿の調査対象である「命令法による発語内効力の示唆」に着目し、その日本語の例として、V-shite kudasai (please VP) を挙げている。山岡 他 (2010: 144-167) は、配慮表現という枠組みを用いて、日本語の依頼表現を類型化しているが、命令系依頼表現の中に「Vてください」を分類している。山岡 他 (2010: 149-151) は命令系の枠組みの中で、以下の例を挙げている。

- (5) 皆さん、落ちついてください。汽車はすぐに止まります。
- (6) 先生どうかドレミファを教えてください。わたくしはついて歌いますから。
- (7) (子が母に) ねえママ、ドレミファを教えてください。
- (8) (夫が妻に) おい良子、オムライスの作り方を教えてくれ。
- (9) 私、三好晃子っていうの。荒井さん? よろしくね。ちょっと服着て来るから待っててちょうだい。

山岡 他 (2010: 150-151) によれば、(5) の「てください」は依頼者への利益を含んでいないため、依頼ではなく丁寧な命令であるという。一方、(6) はそれが含まれており、かつ依頼者が目下であるため、依頼としての役割を果たしているという。そして、敬語によって被依頼者を尊重しているため、消極的=ネガティブな配慮を示しているという。しかし小林 (2009: 136) によれば「～して下さい」は外の関係の無標な依頼表現であり、依頼相手に失礼にならないように頼む場合、それよりも丁寧でない依頼表現は存在しないという。また小林 (2009: 145) によれば、依頼者にとって得になる依頼であるものの、借りができない依頼の場合、無標の「～して下さい」を用いることもできるが、それ以上に丁寧な表現 (例えば「～してもらえませんか」) を使うことによって、相手により丁寧に依頼することが可能であるという。例えば、客が店員に「メニューを見せて下さい」と依頼することができるが、相手により配慮をして「メニューを見せてもらえませんか」と言うこともできる (小林 2009: 137)。小林 (2009) による「V てください」が無標であるという立場を考慮すれば、「V てください」をポライトネス標識と捉えることには問題があるだろう。

また山岡 他 (2010: 150-151) によれば、(7) の「V て」、(8) の「V てくれ」、(9) の「V てちょうだい」の被依頼者は遠慮の要らない親しい人であるという。さらに「V てくれ」は話し言葉においてほぼ男性専用で、女性は「V て、V てちょうだい」を用いるという。これら3つの標識を Brown & Levinson (1978) のポライトネス・ストラテジーに照らし合わせると、それらはポジティブ・ポライトネス・ストラテジー4 の「仲間内であることを示す標識を用いよ」(Brown & Levinson 1978: 107-112) に相当するポライトネス標識であると考えられる。このストラテジー4として、Brown & Levinson (1978: 107) は仲間内の呼びかけ表現、仲間言葉や方言、ジャーゴンやスラング、言葉の省略を挙げている。「V て」は言葉の省略に、「V てくれ、V てちょうだい」は仲間言葉の一形態に相当すると考えられる。

2.3. アラビア語の命令法及びポライトネス標識

Alaoui (2011: 12) はモロッコ方言の命令法に言及している。それによれば、モロッコ方言の命令法は英語の場合と同様、話し手による失礼さのサインを示すという。しかし、llah yxellik 「神が貴方を長生きさせるように」というポライトネス標識を命令法に付加することによって、依頼内容は和らげられるという。以下の (10) が命令法のみ例、(11) はそれにポライトネス標識が付加された例である。

(10) Ṣtenī atay 「お茶を私にください」

(11) Ṣtenī wahd lkas datay, llah yxellik 「お茶を一杯私にください。神が貴方を長生きさせるように」

Alaoui (2011: 12-13) はモロッコ方言において、llah yxellik 以外に、llah yrđi ṣlik 「神が貴方を祝福する」、ṣafak 「神が貴方に健康を与えますように」というポライトネス標識の存在も指摘している。なお Aldhulaee (2011: 29) はイラク方言にもポライトネス標識が存在すると指摘する。モロッコ方言の場合、ポライトネス標識は命令形に付加されていた。つまり動詞に現れる主語と一致標識は2人称であった。しかし、以下のイラク方言において、動詞の一致標識は1人称となっている。

(12) areed kubain gahwa min fathlak

「私は2杯のコーヒーが欲しいです。貴方の恩恵から」

2.4. 先行研究の問題点

2.1 節でポライトネス標識の定義を確認した際、それは「付加される要素」ということであった。しかしその定義を日本語にあてはめると、「Vて」をポライトネス標識と捉えることができない。Blum-Kulka et al. (1989) の考えに従えば、「Vて」を基底として、「くれ」「ください」「ちょうだい」がそれに付加される要素となる。筆者の格下げの定義、及び「Vて」がポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの標識であることを踏まえれば、Bulm-Kulka et al. (1989) のポライトネス標識の定義において、「付加」を明言する必要はない。現時点では、ポライトネス標識に対して、ポライトネス・ストラテジーを実現させる要素であるというように幅広く捉える。

3. ホムス方言の調査方法

シリアのホムス市で生まれ、言語形成期をホムス市で過ごした NA 氏 (女性) からホムス方言のデータを収集した。調査に際し、依頼文が文法的に妥当か否か、またそれを被依頼者に適切に使用できるかという点に注意して、NA 氏に質問を行った。

4. ホムス方言の調査結果と考察

命令法による表現として、以下のものを確認することができた。

(13) Ṣṭī-ni l-qalam law samaht

与える(命単男)-私に その-ペン もし 許す(完2単男)

「(教員が学生に) ペンをとってください。もしあなたが許したら」

いて、女性のホムス方言母語話者が誤って「V てくれ」を使用し、逆に男性話者が「V てちょうだい、V て」を用いる可能性があるというものである。次に、日本語母語話者がホムス方言を習得する際に起こりうる誤用を指摘する。上の第2の相違点で指摘したとおり、ʔalla jxallik(i) は親しい相手に使用できるだけでなく、年上の人にも使用できる。また bhjāta/ek は家族や友達といった親しい相手にしか使用できないということを第4節において指摘した。これは bhjāta/ek の使用領域とʔalla jxallik(i) のそれが部分的にしか重なっていないことを示しているといえる。以上から日本語母語話者がホムス方言を習得する際、bhjāta/ek とʔalla jxallik(i) を常に置き換え可能と考えてしまうと、目上の被依頼者に「bhjāta/ek +命令法」を用い、その人物になれなれしい態度をとってしまう危険性がある。

6. おわりに

本稿ではホムス方言並びに日本語におけるポライトネス標識を伴った命令法を対照分析することを目的とした。2.2節で日本語の命令法及びポライトネス標識を、4節でホムス方言のそれを確認した。

対照分析の結論として、まずホムス方言母語話者が日本語を習得する際、女性の話者が日本語の話し言葉において「V てくれ」を、男性話者が「V てちょうだい、V て」を誤って使用する可能性がある。もう1点は日本語母語話者がホムス方言の習得過程において、bhjāta/ek とʔalla yxallik(i) の使用領域が部分的にしか重なっていないことを踏まえなければ、年上の被依頼者に「bhjāta/ek+命令法」を使用し、なれなれしい態度をとる可能性がある。

筆者はこれまでにホムス方言と日本語の依頼表現における対照分析を行ってきた。特に、Blum-Kulka et al. (1989) が取り上げる格下げに着目してきた。これまで、条件節とポライトネス標識を取り扱ったが、今後はそれ以外の項目も記述し、その対照分析を施したい。

注

- (1) アラビア語は大きく書き言葉の正則語、話し言葉の民衆語に分かれる。民衆語は地域ごとに様々な種類がある。正則語はアラブ世界に共通の言語であり、アラブ世界の新聞、ラジオ、テレビなどで使用されるが、民衆語はそれ以外の日常的な場面で使用される。エジプトにはエジプトの民衆語、シリアにはシリアの民衆語があり、民衆語は地域的な違いを見せている。通常、民衆語が文字に書かれることはない。ホムス方言は民衆語の1つである。ホムス方言のデータに現われる ʕ は [ʃ]、ɣ は [ʒ]、ṣ は [sʰ]、ṭ は [tʰ]、ẓ は [ðʰ]、ḍ は [dʰ] である。母音の上の ː は長母音を示す。本稿の略語は次の通りである。1=1 人称、2=2 人称、3=3 人称、単=単数、男=男性、女=女性、完=完了、接=接続法、命=命令法、V=動詞。
- (2) 本稿ではアラビア語としてホムス方言、先行研究のモロッコ方言、イラク方言を取り上げる。それら3つの言語の特徴として、動詞に主語との一致標識が存在する点を挙げる。すなわち、文に主語が明示されなくとも、動詞の形を見ればその主語が明らかとなる。
- (3) 原文は次のようになっている。‘The grammatical mood of the locution conventionally determines its illocutionary force as a Request. The prototypical form is the imperative’
- (4) 原文は ‘An optional element added to a request to bid for cooperative behavior’ となっている。
- (5) ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーについて、Brown & Levinson (1978) は他者に邪魔をされたくないというネガティブ・フェイスを満たすために、フェイスを脅かす行為が発生させてしまう押し付けの力を軽減するものであると説明する。

- (6) ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーに関して、Brown & Levinson (1978) は他者に好かれたいというポジティブ・フェイスを満たすために、相手に親近感を持つようとするものであると述べている。
- (7) NA 氏によれば、通常、命令法単体は上司や教師といった目上の者から目下の者に対して使用されるという。また友人同士でも命令法の単体は使用可能であるが、何らかの要素をつけるのが自然であるという。

参考文献

- 小林亜希子 (2009) 「国文法を利用した英文法教育の試み (2) : please の使い方」『島根大学法文学部紀要言語文化学術編』127-157
- 二ノ宮崇司 (2014) 「アラビア語北レヴァント・ホムス方言と日本語の条件節を伴う依頼表現の対照分析」二ノ宮崇司・小野正樹・高橋未来 (編)『第 11 回国際学術会議 文明のクロスロード : 言語・文化・社会の様相』18-21
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010)『コミュニケーションと配慮表現 : 日本語語用論入門』明治書院
- Alaoui, Sakina M. (2011) Politeness principle: A comparative study of English and Moroccan Arabic requests, offers and thanks. *European Journal of Social Sciences* 20 (1) 7-15
- Aldhulaee, Mohammed T. (2011) Request mitigating devices in Australian English and Iraq Arabic: A comparative study. Unpublished master thesis. Deakin University.
- Blum-Kulka, Shoshana, Juliane House and Gabriele Kasper (eds.) (1989) *Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies*, Norwood, N.J.: Ablex
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1978) Universals in language usage: Politeness phenomena. In: Esther N. Goody (ed.) *Questions and politeness: Strategies in social interaction*, Cambridge: Cambridge University Press, 56-311
- Takahashi, Satomi (1996) Pragmatic transferability. *Studies in Second Language Acquisition* 18, 189-223

(二ノ宮崇司、カザフ国立大学上級講師、s0430062.ninomiya@gmail.com)